

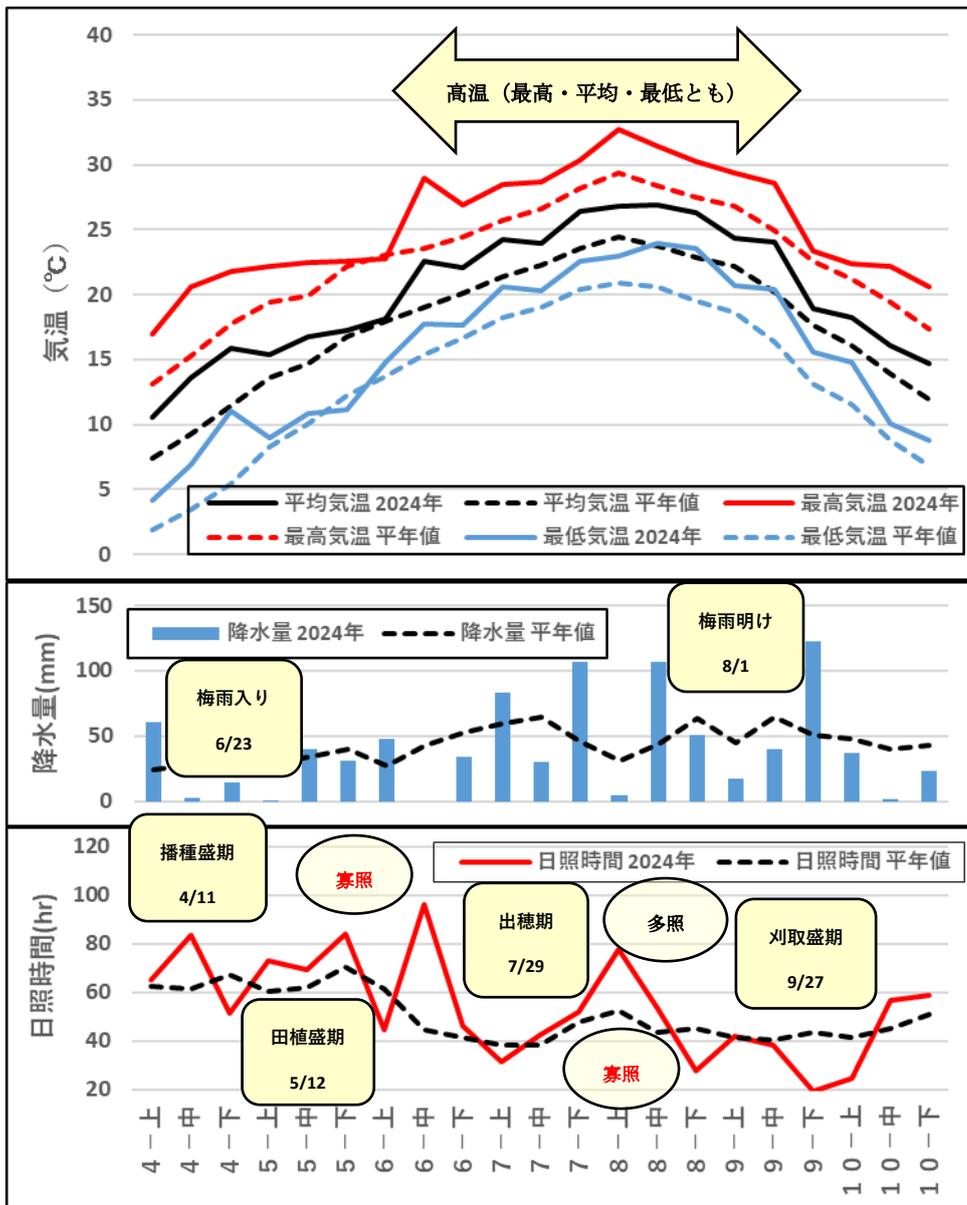
# 令和6年産米 稲作情報 総括号

令和7年3月21日



～令和6年産米の作柄は？ 令和7年はどんな米づくりを？～

## 1 令和6年 稲作期間の気象経過（4月上旬～10月下旬）（古川アメダス）



## 2 播種・田植・出穂・刈取状況

- ・播種始期は平年より1日遅い4月3日，**播種盛期は平年並みの4月11日であった。**終期は平年並みの4月21日であった。県では，近年の茎数過剰傾向や登熟期の高温障害回避を踏まえ，田植えを遅くする「晩期栽培」を推進しているが，概ね平年並みの播種時期となった。
- ・田植始期は平年より1日早い5月3日，**田植盛期は平年より1日遅い5月12日であった。**終

期は平年より1日遅い5月23日であった。

### 播種期(県全体)

区分	播種始期 (5%)	播種盛期 (50%)	播種終期 (95%)
本年	4月3日	4月11日	4月21日
前年	4月2日	4月11日	4月21日
平年	4月2日	4月11日	4月21日
平年差	1日遅い	並	並

### 田植状況(県全体)

区分	田植始期 (5%)	田植盛期 (50%)	田植終期 (95%)
本年	5月3日	5月12日	5月23日
前年	5月4日	5月12日	5月23日
平年	5月4日	5月11日	5月22日
平年差	1日早い	1日遅い	1日遅い

- ・ 本年は全般に高温傾向で生育ステージが早まり、出穂始期は平年より4日早い7月24日、出穂盛期は平年より3日早い7月29日であった。終期は平年より4日早い8月5日であった。
- ・ 高温多照の影響で刈取は大幅に早まり、刈取始期は平年より7日早い9月12日、刈取盛期は3日早い9月27日であった。終期は平年より2日早い10月12日であった。

### 出穂状況(県全体)

区分	出穂始期 (5%)	出穂期 (50%)	穂揃期 (95%)
本年	7月24日	7月29日	8月5日
前年	7月26日	7月30日	8月5日
平年	7月28日	8月1日	8月9日
平年差	4日早い	3日早い	4日早い

### 刈取状況(県全体)

区分	刈取始期 (5%)	刈取盛期 (50%)	刈取終期 (95%)
本年	9月12日	9月27日	10月12日
前年	9月16日	9月24日	10月7日
平年	9月19日	9月30日	10月14日
平年差	7日早い	3日早い	2日早い

◆ 出穂後の積算平均気温による刈取適期の目安は、「ひとめぼれ」(940~1,100℃)の場合、下表のとおりであった。9月中旬まで高温が続いたこともあり、成熟期は大幅に早まり、丸森や白石では8月中旬に成熟期を迎えていたことになる。なお、出穂期(平坦地)は各地区の「平均出穂期」として計算したので、田植えが早かった場合や早生品種では、さらに早まったと考えられる。

アメダス地点	丸森	白石	亶理	仙台	大衡	古川	鹿島台	築館	米山	気仙沼	石巻	
出穂期(平坦地)	7月26日	7月26日	7月28日	7月28日	7月28日	7月28日	7月28日	7月31日	7月30日	8月1日	7月29日	
刈取適期	曜日	積算気温										
8月29日	木	914.4	905.4	853.0	885.9	857.9	855.4	859.7	769.4	801.6	714.0	818.8
8月30日	金	940.0	930.9	878.1	911.4	883.1	880.9	885.5	794.6	827.1	738.1	844.2
8月31日	土	967.4	957.8	904.5	938.1	909.3	907.2	911.7	820.9	853.4	763.4	870.1
9月1日	日	994.4	984.4	930.8	964.9	935.0	933.2	937.7	847.1	879.5	788.3	896.0
9月2日	月	1,022.3	1,012.1	957.5	991.8	960.1	958.3	963.3	872.3	904.9	813.0	920.9
9月3日	火	1,045.2	1,034.4	980.1	1,014.8	981.2	979.9	985.1	893.7	926.4	834.6	942.8
9月4日	水	1,067.8	1,056.6	1,002.7	1,038.6	1,003.3	1,002.4	1,007.5	915.9	948.5	856.6	965.5
9月5日	木	1,092.1	1,080.9	1,026.7	1,063.8	1,027.3	1,026.7	1,031.9	939.9	973.0	880.1	989.7
9月6日	金	1,118.3	1,106.3	1,052.4	1,090.2	1,051.6	1,051.1	1,057.0	964.4	997.9	904.5	1,015.6
9月7日	土	1,143.8	1,131.7	1,077.7	1,116.4	1,076.8	1,076.6	1,082.5	989.3	1,023.2	928.5	1,040.8
9月8日	日	1,167.6	1,155.2	1,101.7	1,140.9	1,100.5	1,100.2	1,106.2	1,012.6	1,046.5	951.0	1,064.4
9月9日	月	1,191.7	1,179.4	1,125.8	1,165.9	1,125.1	1,124.9	1,130.9	1,036.6	1,070.7	973.6	1,088.5
9月10日	火	1,217.7	1,205.3	1,151.4	1,192.4	1,150.8	1,150.1	1,157.0	1,061.5	1,096.4	997.2	1,114.1
9月11日	水	1,244.7	1,232.7	1,178.4	1,220.8	1,177.5	1,177.7	1,184.2	1,088.4	1,123.5	1,023.2	1,141.0
9月12日	木	1,271.5	1,259.2	1,205.0	1,248.2	1,203.4	1,204.1	1,210.0	1,114.2	1,149.0	1,047.0	1,166.6
9月13日	金	1,299.0	1,286.0	1,231.5	1,275.3	1,229.5	1,230.0	1,236.2	1,139.8	1,175.2	1,072.2	1,192.5
9月14日	土	1,321.7	1,308.4	1,253.9	1,297.8	1,251.0	1,251.1	1,258.3	1,160.6	1,197.0	1,093.6	1,215.3
9月15日	日	1,347.1	1,333.2	1,278.8	1,322.5	1,274.4	1,274.7	1,282.6	1,184.0	1,221.1	1,116.7	1,240.1

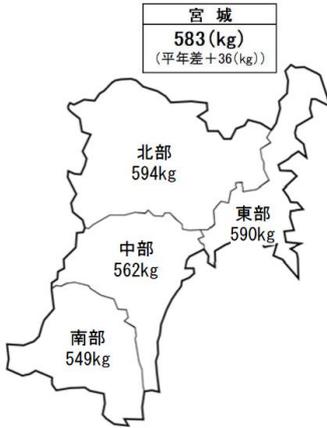
注1) 「ひとめぼれ」の刈取早限は940℃程度、刈取適期は1,000℃程度、刈取晩限は1,100℃程度である。

注2) 気温の積算値は、各アメダス地点の実測値を用いた。

### 3 作柄・収量・品質等

(1) 作柄 (令和6年12月10日 農林水産省, 東北農政局発表)

図1 作柄表示地帯別10a当たり収量 (1.70mmのふるい目幅ベース)



・宮城県の10a当たり収量は586kgで、作況指数は107の「良」となった。

・県内各地域の10a当たり収量は、左図のとおり。

◆東北地域の10a当たり収量は583kgで、作況指数は103の「やや良」であった。各県の収量・作況指数は、以下のとおり。

- 青森県 623kg 103 「やや良」
- 岩手県 569kg 106 「良」
- 秋田県 582kg 102 「やや良」
- 山形県 583kg 97 「やや不良」
- 福島県 569kg 102 「やや良」

◆なお、全国の10a当たり収量は540kgで、作況指数は101の「平年並み」であった。

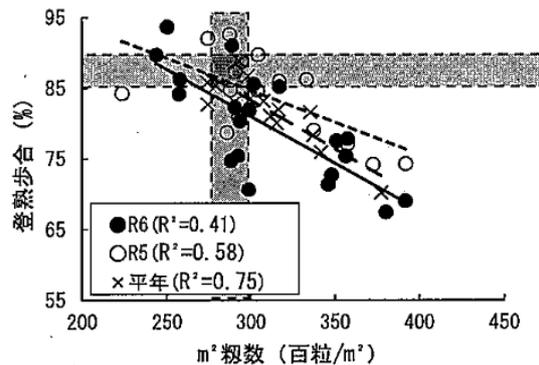
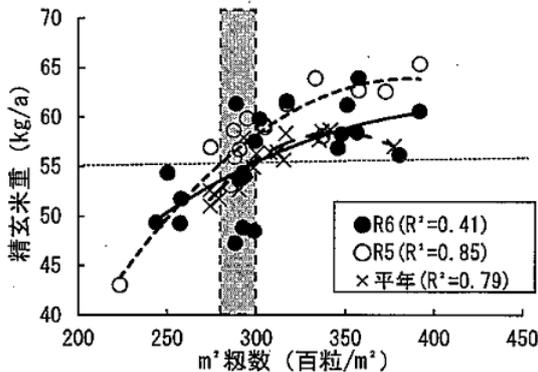
(2) 県生育調査ほの収量調査結果 (令和6年度 水稻作柄検討会資料より)

区分	品種	㎡穂数(本/㎡)			1穂粒数(粒/穂)			㎡粒数(百粒/㎡)		
		本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)
生育調査ほ	ひとめぼれ n=18	431	99	97	71.1	101	102	305	99	99

区分	品種	登熟歩合 (%)			玄米千粒重(g/千粒)			精玄米重(kg/a)		
		本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)	本年値	前年比 (%)	平年比 (%)
生育調査ほ	ひとめぼれ n=18	81	96	98	22.8	101	103	55.6	96	100

◆農林水産省が発表した宮城県の作況指数は「107」だが、これは1.7mmのふるい目によるものであり、生産出荷規格の1.9mmでふるった場合は、5~6%程度収量は低下する。

→出荷収量は、概ね平年並みであったと推測される。



○網掛け部分は栽培ごよみの目安を示す(精玄米重 550kg/10a, ㎡粒数 28~30 千粒)  
○実線は令和6年, 点線は令和5年, 破線は平年のもの(令和6年度 作柄検討会資料より)

◆県水稻生育調査ほ (ひとめぼれ 18 ほ場)の平均値

- ・㎡穂数 → 平年をやや下回る
- ・一穂粒数 → 平年をやや上回る
- ・㎡粒数 → 平年並み
- ・登熟歩合 → 平年をやや下上回る
- ・千粒重 → 平年を上回る
- ・精玄米重 → 平年並み
- ・㎡粒数が増えるほど 精玄米重は高まるが 登熟歩合は低下した

(3) 令和6年産米の検査結果（宮城県JA農産物検査協議会資料）

令和6年産米 検査実績（令和6年12月末日現在）

区分	1等		2等		3等		規格外		総検査数量 (kg)
	検査数量 (kg)	比率 (%)	検査数量 (kg)	比率 (%)	検査数量 (kg)	比率 (%)	検査数量 (kg)	比率 (%)	
うるち米	113,531,750	89.7	12,200,220	9.6	668,460	0.5	128,038	0.1	126,528,468
もち米	96,420	3.1	2,650,290	85.5	352,380	11.4	0	0.0	3,099,090

- ・うるち米全体の検査数量は126,528 t。1等比率は89.7%であった。令和5年産の同時期に比べ、約7ポイント高かった。
- ・もち米全体の検査数量は3,099 t。1等比率は3.1%にとどまった。令和5年産の同時期に比べ、0.2ポイント高かった。

令和6年産米 2等以下格付理由の比率（令和6年12月末日現在）

区分	整粒不足	形質				被害粒				着色粒			異種穀粒
		充実度	心白・腹白	その他	計	発芽粒	胴割粒	その他	計	カメムシ	その他	計	
うるち米	0.0	4.6	2.2	0.0	6.8	0.1	0.1	0.0	0.2	2.8	0.1	2.9	0.0
もち米	0.0	92.7	0.0	0.1	92.8	2.0	0.5	0.0	2.5	1.5	0.1	1.6	0.1

※ラウンドの関係で、合計は一致しない場合がある。

① うるち米の落等理由

- ・第1位は「形質」、第2位は「着色粒」、第3位は「被害粒」であった。
- ・形質では、充実度（不足）によるものが最も多かった。収穫時期の降雨が多く、刈り遅れによって倒伏が助長され、登熟が不十分だったためと推測される。また、高温の影響で心白・腹白も多かったが、令和5年産米に比べると少なかった。高温によるストレスが、令和5年より少なかったためと推測される。
- ・着色粒では、カメムシ類による斑点米が一部地域で多い傾向にあった。県南部では、大型のクモヘリカメムシが増加傾向にあることも、理由の一つと考えられる。
- ・ササニシキや金のいぶきでは、穂発芽による落等も見受けられた。

② もち米の落等理由

- ・第1位は「形質」、第2位は「被害粒」、第3位は「着色粒」であった。
- ・うるち米と同様、倒伏が多く、登熟が不十分だったためと推測される。
- ・被害粒では、高温登熟・降雨・刈り遅れによる発芽粒、胴割粒の発生が多かった。

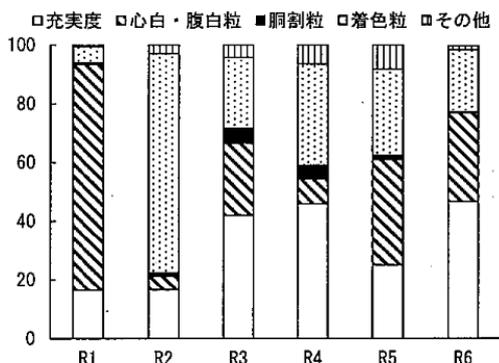


図25 2等以下の主な落等要因  
(宮城県JA農産物検査協議会：9月末現在)

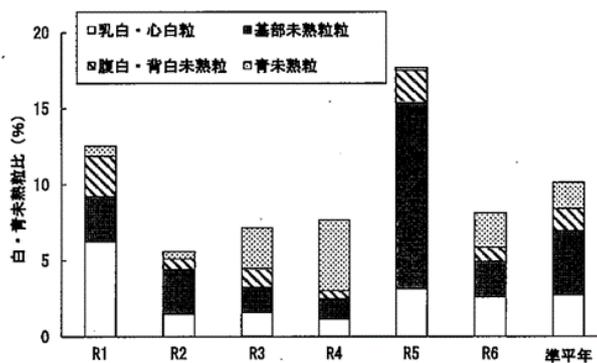
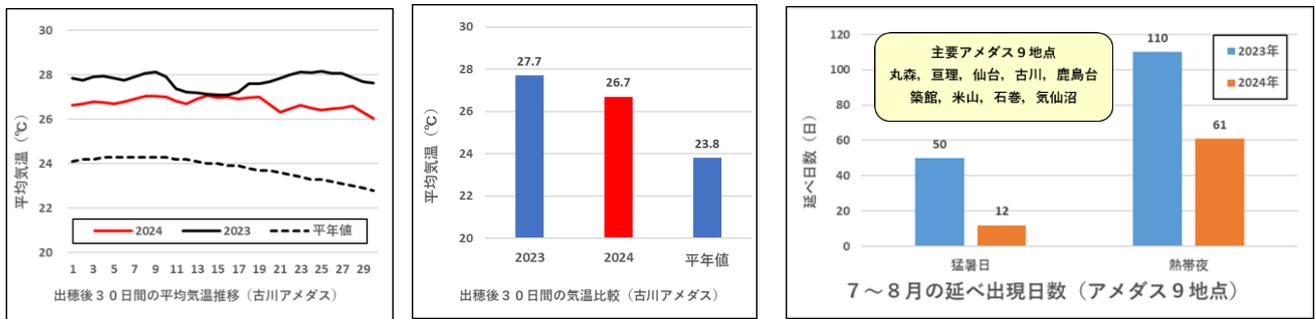


図26 白・青未熟粒の内訳  
(生育調査ほ+作況試験ほ「ひとめぼれ」n=18)  
注) 穀粒判別機：R6～3 サタケRGQI 100B、R2～ サタケRGQI 10Aを使用。

- ・令和6年は「乳白・心白粒」の発生は平年並みだったが、「基部未熟粒」及び「腹白・背白未熟粒」の発生は平年より少なくなった。

## 4 作柄の要因解析

### (1) 2024年と2023年の気温比較



- ・出穂後30日間の平均気温（左図は7日間の移動平均）は、2023年は27.7℃で、後半により高くなっていた。一方、2024年は26.7℃で、1℃の差ではあるが、2023年より低かった。
  - ・県内の主要アメダス地点における7～8月の「猛暑日・熱帯夜」の出現日数を見ると、猛暑日では2023年は延べ50日であったが、2024年は延べ12日で前年の約1/4であった。また、熱帯夜では2023年は延べ110日であったが、2024年は延べ61日で前年の約1/2であった。
- 平年より高温ではあったが、2023年より高温によるストレスは少なかった。**
- 白未熟粒は発生したが、前年より少なかった。**

### (2) 各要因から推察した米の品質（白未熟粒の発生等）に関する各年産米の特徴

年産等	1等比率 (%)	20日間平均気温 (°C)	20日間積算日照時間 (hr)	水稻全粒数 (百粒/m <sup>2</sup> )	水稻減数裂期葉色(GM)	その他	概要
令和6年	88	27.9 高温	118 多照	306 やや多	37.0 期待値並み	出穂後降雨 収穫期降雨	高温で粒数は多かったが 葉色値は期待値並みで多照だったため 前年より品質は高かった
令和5年	82	28.5 高温	140 多照	285 適正	33.8 やや低い		著しい高温で 葉色値も低かったが 極多照であったため 転流の阻害は少なかった
令和4年	96	25.7 適温	84 やや少照	299 適正	36 適正		日照少なめだが 気温・粒数・葉色値が適正に保たれていた
令和元年	71	26.5 やや高温	86 やや少照	304 やや多	37-38 やや高い		粒数多く 高温で やや少照であったため 穂への転流が阻害され 乳白粒が発生
平成24年	87	26.0 やや高温	119 多照	291 適正	33.9 やや低い		登熟初期～中期の高温で 玄米が急激に肥大し 基白粒や背白粒が発生
平成22年	74	27.2 高温	133 多照	284 適正	32 低い	収穫期降雨	高温で 葉色値が低下したため 転流が阻害され 白未熟粒が発生 刈り遅れも発生
平年値・適正值	-	24.9	97	280-300	35-37		

- ・令和5年は、記録的な猛暑の上、日照時間が多く、稲体が消耗して葉色が低下して、白未熟粒が多発し、1等比率は低かった。
  - ・令和6年も気温は高かったが、前年よりは低く、多照であった。また、水稻の減数分裂期における葉色は期待値並みで維持されており、粒数が多かったため登熟歩合は低下したが、千粒重が重くなり、収量は概ね平年並みを確保でき、白未熟粒の発生も前年よりは少なかった。
- 追肥や土づくりにより、葉色を維持できたことが、品質低下を軽減できたものと推察される。**

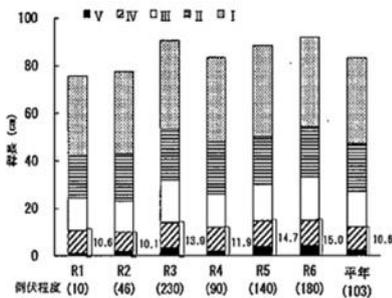
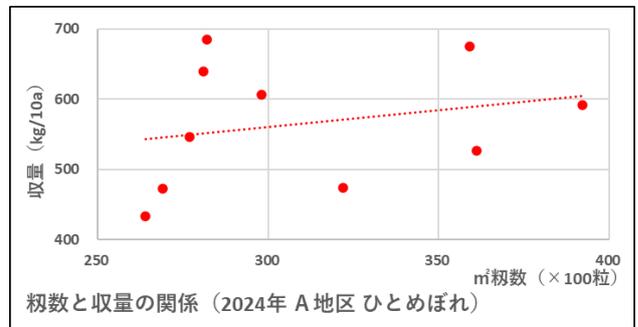
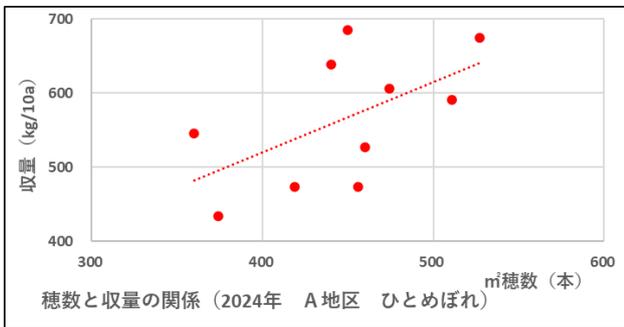
(3) その他 6年産米の特徴

- ・ 移植時期の5月（下表）は石巻や登米地域を中心に強風が吹くことが多く、移植日が強風と重なったほ場では、植え痛みや活着の遅れが生じたものと推測される。
- ・ 令和5年は、強風の出現日数が令和6年ほど多くなかった（データ略）。

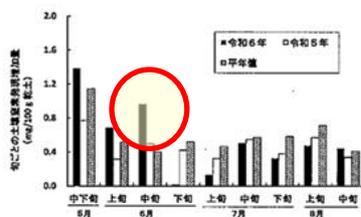
アメダス	丸 森		亘 理		仙 台		古 川		鹿島台		築 館		米 山		石 巻		気仙沼	
令和6年5月〇日	最大風速 10m/s 以上	瞬間 最大風速 15m/s 以上																
1	7.3	12.3	6.5	9.8	9.3	12.4	9.1	11.5	7.6	11.8	5.3	7.8	7.9	9.6	10.2	14.0	4.7	10.0
3	7.4	12.3	6.8	8.8	5.0	8.4	9.8	14.1	7.3	12.1	7.7	14.1	13.7	17.5	8.1	12.2	4.4	10.3
6	10.9	17.4	10.2	15.3	7.4	12.0	4.5	6.4	6.6	10.3	3.0	5.2	9.7	12.1	10.5	15.6	4.0	7.3
7	9.7	15.8	10.2	15.3	9.6	16.5	6.0	9.4	8.2	12.8	4.7	8.7	8.7	12.0	10.1	15.2	4.2	9.4
8	7.0	11.5	6.2	10.7	11.5	14.9	10.2	14.6	8.5	13.8	4.8	9.0	10.0	13.3	10.9	16.9	4.3	9.6
10	6.2	11.6	7.2	10.1	6.6	11.3	9.5	14.3	9.2	14.5	6.5	11.0	12.9	17.1	10.2	16.2	4.4	11.5
12	8.6	16.6	10.4	15.3	13.0	19.3	6.6	10.5	11.4	16.5	4.3	9.4	11.9	15.4	11.3	17.7	6.7	11.8
13	7.6	13.0	6.0	10.1	9.2	13.3	10.0	13.0	7.4	11.6	3.5	6.1	11.0	15.5	10.9	16.2	3.3	7.4
17	11.1	19.4	15.4	22.9	9.9	20.1	12.3	19.1	11.6	16.4	8.2	17.8	15.1	20.0	10.2	15.0	6.7	17.2
18	4.1	7.6	8.4	11.0	7.0	9.3	5.5	7.9	7.7	10.6	5.9	10.7	10.3	13.0	6.6	11.9	4.0	9.1
21	9.0	17.8	8.8	13.7	9.5	15.3	13.4	20.2	12.9	18.0	7.9	14.3	15.4	21.2	12.8	20.3	6.6	17.5
24	8.6	14.7	7.3	11.6	8.4	13.0	9.4	13.7	9.4	14.6	5.4	10.4	15.5	18.6	9.9	15.1	4.0	9.3
25	7.2	12.1	7.9	12.9	8.7	15.0	10.3	14.8	10.0	14.6	5.2	10.6	11.9	14.8	12.9	19.0	5.6	13.6
26	7.1	10.2	8.1	10.8	8.3	11.8	4.2	7.5	8.7	12.3	3.8	7.5	9.4	12.4	11.1	17.3	6.1	11.0
27	9.9	16.0	9.4	14.7	9.8	14.8	8.2	12.4	8.8	11.4	3.7	6.9	10.1	12.9	9.1	13.5	4.3	7.6
28	4.6	7.7	5.4	8.8	7.8	12.6	6.9	9.5	7.6	11.5	5.0	9.1	5.5	8.1	12.9	18.8	4.2	8.4
29	8.9	15.0	7.8	11.6	8.8	15.0	12.0	18.1	12.0	17.7	6.1	10.7	13.6	16.9	13.8	19.9	5.0	13.7
延べ日数	2	7	4	4	2	6	6	3	5	4	0	1	12	8	13	13	0	2
10年平均	1.9	4.7	4.2	4.6	4.1	5.3	5.7	5.4	5.1	6.2	0.4	2.4	6.2	5.0	7.3	7.3	0.0	2.3
令和5年	0	1	2	2	1	2	3	5	3	3	0	0	4	4	6	7	0	0

※10年平均は、平成26年から令和5年までの期間に最大風速10m/s以上及び瞬間最大風速15m/s以上が発生した日数の平均値である。

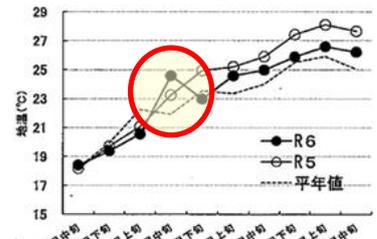
- ・ A地区の展示ほのデータを見ると、 $m^2$ 当たり穂数や $m^2$ 当たり粒数の増加とともに収量も増加傾向にあった（下図）。
- ・ 5月末から6月初めの低温少照や、強風による植え痛みのために初期生育が抑えられたほ場では、 $m^2$ 当たり穂数や $m^2$ 当たり粒数を確保できずに収量が伸びなかったと推測される。



注1) 平均値：過去5か年（令和元～令和5年）平均値  
2) 年次下の（ ）数字は倒伏程度（0-400）  
3) 凡例：第1～5節間長をⅠ～Ⅴで表記



注1) 古川試験場ほ場内ほ場で実施した。  
2) 施肥前に採土し（採土日：4月20日）、調製・冷蔵保管後、水稲移植日にサンプルを封入した培養ビン埋め込んだ。  
3) 旬ごとの土壌窒素発現増加量は、各旬（約10日間）に増加した量を示す。  
4) 平均値は令和元年～令和5年の5か年における平均値  
5) 凡例中の数値は期間中の土壌窒素全発現量を示す。



注1) 図13と同一ほ場の地温  
注2) 平均値は令和元年～令和5年の5か年における平均値

- ・6年産米（古川農業試験場 作況試験ほ, 5/10 移植 ひとめぼれ）の稈長は、平年比 111%と長かった。特に、下位の第4・5節間長は平年比 123%で、令和3年に次いで長かった。
- ・節間長は、概ね出穂期の 35 日前から始まる。本年は、6月中旬の高温・多照（+降雨無し）によって水田の地温が上昇し、土壌窒素発現量が増加したために水稻の窒素吸収が進み、下位節間を中心に草丈が急激に伸長したものと推測される。
- ・稈長が伸びたことと、収穫時期の断続的な降雨によって刈り遅れが生じ、倒伏が助長されたと思われる。

## 5 令和7年産に向けて（令和6年度 第2回 良質米づくり研修会資料 ほか）

### （1）登熟期の高温とその影響

- ・登熟期の高温による影響（白未熟粒や胴割粒の発生）については、**令和5年産米 稲作情報 統括号**を参照されたい。

### （2）高温障害のリスク低減技術

イ 適切な土づくり（土壤管理）で地力を高める

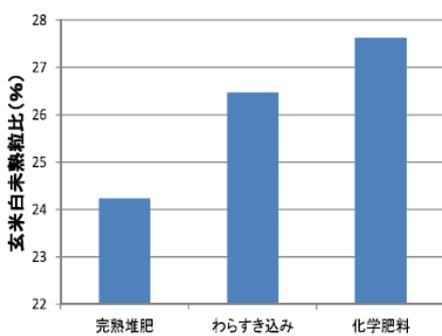
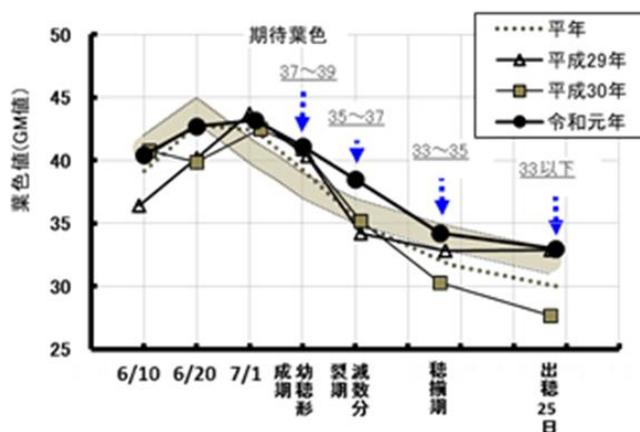


図3 有機物の連用施用と玄米白未熟粒比の関係  
注1) H22年（高温年）のデータ。  
注2) 古試「ひとめぼれ」有機物を9年連用のほ場。

- ・堆肥や稲わら等の有機物を施用し、地力を高めることによって登熟期間の稲体の活力が維持され、品質低下の防止につながる（左図）。
- ・ただし、投入量が過剰になると、籾数が増えすぎて乳白粒が増える恐れがあるので、地力に応じた投入量とする。
- ・作付け直前に稲わらや未熟堆肥を施用すると、イネの窒素不足や水田土壌からのガスの発生要因となるので注意が必要である。

ロ 適切な診断に基づく肥培管理で登熟後半の葉色を維持する



- ・穂揃期や出穂後 25 日の葉色が高いほど、基白粒は少ない傾向にある。
- ・近年は、6月～7月の気温が高く、肥料からの窒素成分の溶出が早まり、穂揃期以降の葉色が低下しやすい傾向にある（左図）。

※一発肥料は、平年並みの気温で推移した場合に理想的な窒素溶出が行われるように作られているため、高温年では早めにチッソが溶出して、生育後半に葉色が低下することがある。 → 一発肥料で

- ・本年は葉色が期待値以下に低下する場合は、追肥が必要（流し込み施肥などで対応）である。
- ・本年は葉色が維持され、白未熟粒の発生は令和5年産米より少なかった。

ハ 晩期栽培・直播栽培で出穂期を遅くし、早期出穂による高温のリスクを軽減する

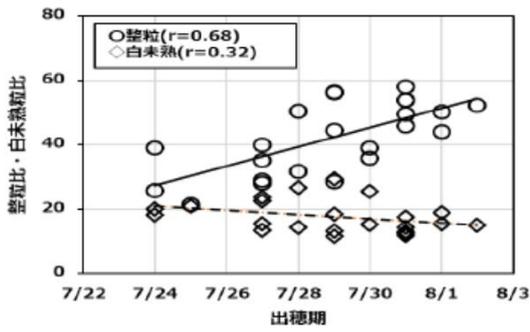


図 19 出穂期と整粒及び白未熟粒（「ひとめぼれ」）

注 1) 生育調査ほ+作況試験ほ (n=26)

2) 実線は整粒比、破線は白未熟粒比の近似曲線

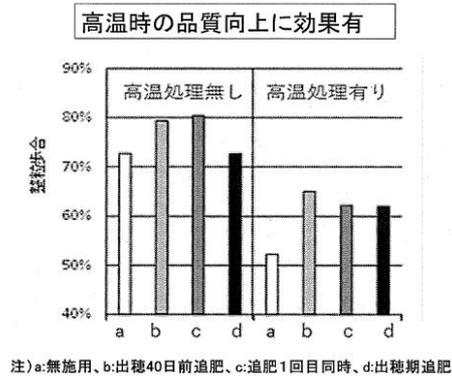
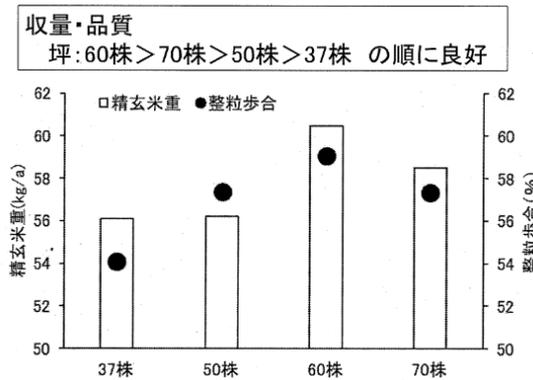
・ 出穂期が遅くなるほど、白未熟粒の比率は低下する（左図）。

・ 出穂期を遅らせる（＝田植えを遅くする）ことで、高温登熟による基白粒や腹白粒、乳白粒などの発生軽減が期待できる。

→ 田植えを5月15日～25日に行う「晩期栽培」や「直播栽培」が有効である。

・ 「つや姫」など、晩生品種の導入も、出穂期が遅くなるので、同様の効果が期待できる。また、全農宮城県本部では、令和7年度にコシヒカリ並みの出穂期を持つ晩生の業務用米「にじのきらめき」の展示ほを設置し、作期分散に活用していく予定である。

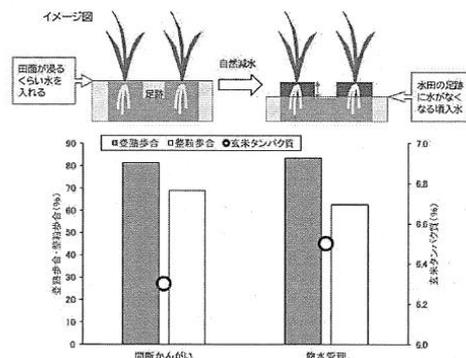
ニ 収量・品質の安定する栽植密度とは？ 高温時にはケイ酸資材の追肥が有効？



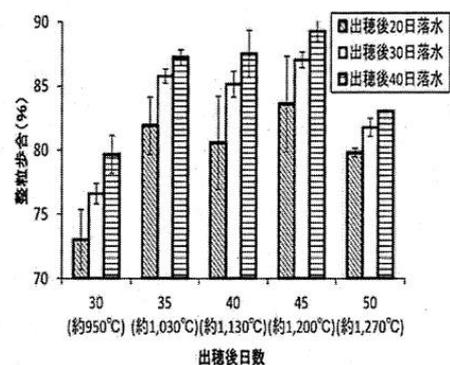
- ・ 宮城県古川農業試験場の令和5～6年の試験によれば、灰色低地土（標準的な地力）では、坪60株植えが最も高い収量・品質を得られた。疎植栽培では穂数や粒数が不足し、減収することがある。また、密植栽培は逆に粒数過剰となり、品質低下を起こすことがある。
- ・ 新潟県が平成26～27年に実施した試験によれば、高温年にケイ酸質資材を追肥すると、品質向上効果が認められた。水稻の茎葉が丈夫になり、受光体勢が改善されるためと推測される。

ホ 出穂前後は「飽水管理」を実施 落水時期は出穂30日以降を目安とする

飽水管理→慣行の間断かんがいと同等の品質



出穂後30日以降に落水すると品質が安定



- ・ **出穂前後は、足跡に水が溜まる程度にかん水し、水が無くなったら補充する「飽水管理」を行う。**かん水の手間はかかるが、多くの水を必要とせず、水の蒸発によって水田内の気温を下げる効果がある。慣行の「間断かんがい」と同等の品質が得られる。
- ・ **収穫前の落水は、出穂後 30 日以降に行うと品質が安定する。**土壌型によって水田の保水力に差はあるが、早めの落水は整粒歩合が低下する原因となる。

へ 大型のクモヘリカメムシが生息域を拡大中！

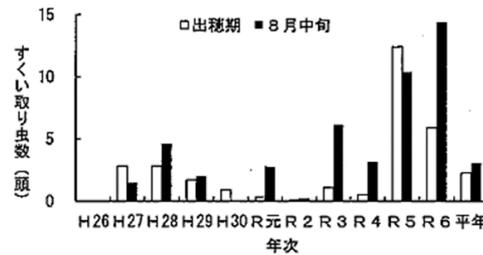
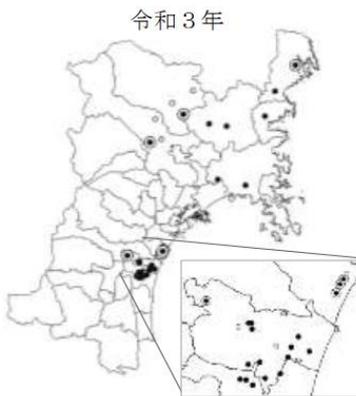


図 15 大河原管内におけるクモヘリカメムシすくい取り虫数の推移 (本田、出穂期・8月中旬) (令和6年宮城県病害虫防除所)



【宮城県病害虫防除所】

- ・ 本年は斑点米カメムシ類の発生量が多く、宮城県病害虫防除所では7月19日付けで「注意報第1号」を発行し、適期防除の実施を呼び掛けた。
- ・ これまで県南及び仙台市沿岸部で確認されていた大型のクモヘリカメムシは、県北内陸部まで生息域を拡大していることが判明した【宮城県「普及に移す技術」第97号】。**令和6年10月、栗原市でも確認されたとの情報提供有り。**
- ・ 県南地域においては、さらに発生量(すくい取り虫数)が増加傾向にあった(中図)。

ト 出穂後の日積算平均気温からみた「金のいぶき」の穂発芽対策

表6 「金のいぶき」の玄米品質(ふるい目1.85mm)

刈取日	みなし整粒(A)-(B)	整粒(A)	粒数比(%)				死米粒	青未熟粒	その他未熟粒	穂発芽粒	玄米サイズ(mm)			食味品質		農産物検査結果	穂水分(%)	出穂後積算気温(℃)	
			①+②+③	①粒白	②粒白	③粒白					玄米長	玄米幅	玄米厚	タンパク含有率(15%補正)	アミロース(15%補正)				
+35	29.8	0.9	28.9	28.9	0.0	0.0	66.4	0.0	0.3	0.0	54.5	2.66	2.04	6.8	7.4	10	29.9	937	
+40	28.4	1.4	27.1	27.1	0.0	0.0	67.3	0.0	0.1	0.0	53.1	2.65	2.03	6.9	7.3	10	28.3	1043	
+45	30.1	1.4	28.7	28.7	0.0	0.0	65.3	0.0	0.0	9.3	54.1	2.76	2.10	6.9	6.5	10	28.2	1180	
+50										14.3									1268
R5	13.9	3.2	10.7	10.7	0.0	0.0	80.4	0.0	0.0	15.6	54.2	2.75	2.16	7.0	10.2	10	27.7	1258	
3カ年平均値	57.6	2.8	54.8	33.0	21.3	0.5	36.2	0.4	2.1	-	54.5	2.77	2.09	7.6	11.6	-	-	-	
平年比	52.0	50.0	52.0	87.0	0	0	180	0	1	-	99	100	101	91	56.0	-	-	-	

- 注1) 平年値：過去5カ年(令和元年～5年)の平均値。  
 2) 農産物検査結果(1～10)：1は1等の上、2は1等の中、3は1等の下～10は規格外。  
 3) 穂発芽粒は、生育中庸な3株の全粒を調査し、その後穂水分を測定した。  
 4) 穀粒判別器：R6～R3 サタケRGQI100Bを使用。  
 5) +50の品質判定は、未測定。

- ・ 令和6年産「金のいぶき」のみなし整粒比(+45日)は30.1%と前年(13.9%)よりは増加したが、平年(52%)より大幅に低下した。
- ・ 農産物検査結果は10(規格外)となった。
- ・ 穂発芽は、出穂後40日まではほぼ0%だったが、その後の降雨により増加した。

8月	3日	金のいぶき			出穂後 日数	降水量
		2024年				
	4日			出穂期	積算気温	
	5日					
	6日	平年値		27.5	27.5	1 0.0
	7日	出穂期	積算気温	26.3	53.8	2 2.0
	8日	24.3	24.3	26.6	80.4	3 0.0
	9日	24.2	48.5	27.2	107.6	4 0.0
	10日	24.2	72.7	26.9	134.5	5 0.0
9月	1日	22.5	586.2	26.0	718.3	27 0.0
	2日	22.4	608.6	25.1	743.4	28 7.0
	13日	20.6	845.4	25.9	1015.1	39 0.0
	14日	20.4	865.8	21.1	1036.2	40 7.5
	15日	20.2	886.0	23.6	1059.8	41 8.5
	16日	20.0	906.0	20.7	1080.5	42 6.0
	17日	19.7	925.7	23.8	1104.3	43 0.0
	18日	19.5	945.2	24.2	1128.5	44 0.0
	19日	19.3	964.5	24.3	1152.8	45 0.0
	20日	19.0	983.5	22.1	1174.9	46 18.0
	21日	18.8	1002.3			47 76.0
	22日	18.6	1020.9			48 43.0
	23日	18.3	1039.2			49 1.5
24日	18.1	1057.3			50 0.0	
	25日	17.9	1075.2			
	26日	17.7	1092.9			
	27日	17.5	1110.4			
	28日	17.4	1127.8			
	29日	17.2	1145.0			
	30日	17.0	1162.0			

○出穂後の日平均積算気温による刈取適期は 1,050～1,150℃、出穂後日数では 45～50 日が目安である。

→展示ほにおける出穂期の平年値は 8 月 7 日である。出穂後は平年並みの気温で推移したとして日平均気温を積算すると、9 月 24～29 日頃が刈取適期となる。

◎2024 年は高温の影響で出穂期が 8 月 5 日に早まり、出穂後も高温で推移したため、刈取適期は 9 月 15～19 日頃となった（出穂後日数では 41～45 日）【古川アメダス】。

→出穂後 40～42 日と 出穂後 46～49 日に降水があった。

▲出穂後 45 日から「穂発芽」は増加した（前述）。

→概ね成熟期に達した時期に降雨があり（9 月 14～15 日及び 9 月 20～23 日）、穂発芽が増加したと推測される。

→成熟期に達したら、降雨に当たる前に収穫することが、穂発芽対策として最も重要と推測される。

→刈取適期は、降雨の無かった 9 月 13 日及び 17～19 日頃と考えられた。

「他の品種を後回しにしても、最優先してチャンスを逃さずに刈る！」ことが重要である。

**＝「基本技術こそ確かな未来」＝**